

經濟論叢 每月十日發行
 第四十七卷第二號 昭和十三年八月一日發行
 大正四年六月二十一日第三種郵便物認可

東京帝國大學經濟學會

經濟論叢

第四十七卷 第二號

昭和十三年八月一日發行

貨幣は被覆なりや……………	文學博士 高田保馬
日本國民經濟の根本性格……………	經濟學博士 石川興二
統計機關論……………	經濟學博士 蜷川虎三
連繫貿易制(Link system)に就いて……………	經濟學博士 谷口吉彦
純粹理論經濟學と日本國民主義……………	經濟學士 柴田敬
理論經濟學との間の距離……………	經濟學士 德永清行
支那經濟に於ける銀の地位……………	經濟學士 青山秀夫
ワルラスに於ける動學化の問題……………	經濟學士 青山秀夫
近世絞油業の生産機構……………	經濟學士 住谷勇二
資本及び資本形成理論の二元性……………	經濟學士 中谷實
ドマンデヨン、村落と田舎共同體……………	經濟學士 宮本又次
外國雜誌論題……………	

(禁 轉 載)

説苑

資本及び資本形成理論の二元性

中 谷 實

一 序

資本制經濟の理論として最も重要な地位を占むるものは資本理論並びに資本形成の理論であつて、最近の貨幣理論景氣理論も亦専ら此れに基いて組立てられてゐるものと言つて差支ないであらう。然るに資本制經濟は貨幣經濟であり市場經濟であるが故に、其處には必然的に自然經濟的乃至實物經濟的なる面と、貨幣經濟的なる面との二つの面が考へらる可く、従つて資本理論及び資本形成理論も亦自然經濟的乃至實物經濟的に考察せられると同時に貨幣經濟的にも考察せられねばならない。即ち資本及び資本形成の理論は二元的に考察せられるのであつて、此れが一面的なる考察は

資本及び資本形成理論の二元性

其の何れの方法に従ふにせよ充分なる解答を與ふるものでは無く、殊に貨幣經濟の自然經濟乃至實物經濟よりの乖離は此の問題を一層困難ならしめるものである。然らば從來此の問題は如何に取扱はれて來たか、詳言せば資本理論及び資本形成理論は自然經濟乃至實物經濟的考察と貨幣經濟的考察とを如何に調和せんとしたか。此の點を明らかにする事は此の問題に關する無益なる論争を避け得られるものと考へられるが故に、主としてボエア¹⁾に従ひて出来るだけ簡單に此れが考察を加へる事とする。

二 資本理論の二元性

資本概念については、從來此れを物質的に解するものと非物質的に解するものとの間に激しき論争が繰返されて來たが、現時の市場經濟に即して言へば實物經濟的なる資本理論と貨幣經濟的なる資本理論との對立が見られるのである。即ち、資本を以て「生産せられたる生産手段」となし、又は資本財或は中間生産物等

第四十七卷 二九五 第二號 一三七

1) Alexius Boér: Kapitaltheorie und Kapitalbildung (Jahrb. f. Nationalö. u. Statistik, Bd. 147, Heft. 1. S. 28.

と呼ぶものは前者に屬し、資本を以て抽象的な貨幣額とし或は其の購買力なりとする説は後者に屬する。

然るに斯かる一面的なる資本概念の説明を排する時には兩者の間に折衷的な理論が求められねばならず、或は更に一つの上位概念を求めて其の下に實物經濟的な資本概念と貨幣經濟的な資本概念とを對立せしめる事も考へられるが、斯かる試みは未だ充分に完成せられずして、謂はゞ混合概念たるに終る場合が多いのである。即ち例へば、一方に於て貨幣貨銀を以て貨幣資本の構成分子となし他方に於て生存資料資源の一部を以て此れに對應する所の實物資本となし、此等の上位概念として資本なる概念を考へる事も強ち不可能ではないであらう。然し乍ら斯かる場合には資本の二重計算が行はれる譯であつて、貸借對照表に例を借れば、其の借方と貸方とが一致するが如くに此の資本の二重計算が常に百%に一致し得るならば、斯かる資本概念も亦許されるであらう。然るに事實上、資本の問題に於ては財の側と貨幣の側とは唯一部分に於て

のみ平行的に發展し得るのみで全面的なる一致を見得ないが故に、此の點に於て斯かる混合的資本概念は大なるデインレマに陥らざるを得ないのである。²⁾

斯くて、資本理論の二元性を解決す可き唯一の道は所謂職能的資本理論であつて、此れこそ資本の實物經濟的考察及び貨幣經濟的考察の上位に位す可く、種々雑多の形態を以て現はれる總ゆる資本問題に妥當すべきものと言はれるのである。即ち斯かる資本理論を唱ふるものとしてはジューデンホルスト³⁾及びヘルラー⁴⁾が挙げらる可く、前者は資本を以て所得獲得の爲の財産高とし、それは時によりて其の形態を變へるものと言ふのであるが、後者は資本を以て一の經濟力となし、斯かる力が交換力によりて財の所有を可能ならしめると見るのである。

右の如く資本概念の二元性は、資本の職能を強調する事によりて一應解決せられたものと見られるのであり、且つ資本理論としては斯かる一元的なる解釋が望ましいのであるが、然らば斯かる資本概念とマツチス

2) a. a. O. S. 31.

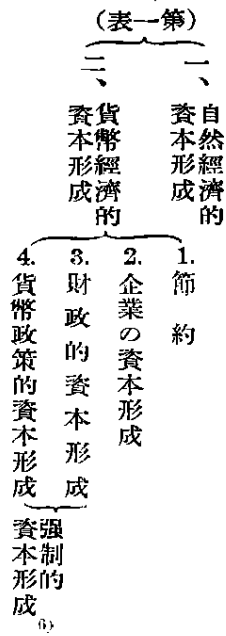
3) Zwiedineck-Südenhorst: Kapital und Kapitalismus, zur Terminologie und Begriffsbestimmung in der „Schmollers Jahrbuch“ 54 Jahrg. II. Halbbd. 1930, S. 1070.

4) Wolfgang Heller: Zum Streit um die Kredittheorie, „Zeitschrift f. gesamte Staatsw.“ 1931. Bd. 90, S. 554.

可き資本形成理論が存在するか。次に述ぶるが如くに、資本形成理論は先づ貨幣經濟的なる節約理論より初まるものが多く、次で生産過程を考慮に入れるのであるが、最後に生産の結果を判定するには價格構成と云ふ貨幣經濟的現象を以てするものが多いのである。而して斯かる資本形成理論の行き方が今尙資本の二元的解釋が一般に行はれる事實に與つて力あるものと考へられるのである。

三、資本形成の源泉と貨幣的摩擦

次に資本形成の過程を説明するものを概観するに、其の根本思想に於ては實物經濟的なる考察によるものもあれど、先づ一般には貨幣經濟的なる考察より出發するを常としてゐる、例へばレプケの如きも各種の資



資本及び資本形成理論の二元性

本形成の根源を第一表の如くに表示してゐるのである。而して表中の自然經濟的資本形成は全然無視せられてゐる譯ではないが、今日では農業に於てのみ其の重要性を認め得るに過ぎずして、市場經濟に於ては専ら貨幣經濟的資本形成の重要な所以が強調せられてゐるのである。

然らば資本形成の理論に於ては、何故に實物經濟的考察によりて其の概念が打立てられず専ら貨幣經濟的考察より出發せられるのが常であるか。それは一つには、資本形成に於て信用の營む役割の餘りにも大なる事にもよるのであらうが、他方には、假令資本形成の理論を生産より初める立場に於ても、自然經濟の如何なる部分に於ける節約が實物資本の形成を可能ならしめるものであるかが、判然と指示せられ得ない事に求められねばならぬのである。又現實の問題としても、資本形成の最初の刺戟が貨幣經濟的現象にある事是否定し難く、第一表の第二に示されるが如き貨幣經濟的現象に基いて實物經濟的意味に於る資本の形成も行は

5) 例へば Clerk.

6) W. Röpke: Die Theorie der Kapitalbildung (Recht u. Staat II. 63) 1929, S. 17

7) Boër: a. a. O. S. 35

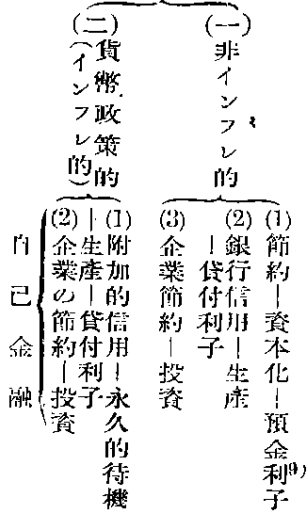
るのれ得である。

右の如く資本形成理論は専ら貨幣經濟的考察より出發するものではあるが、それは最後迄専ら貨幣經濟的事象のみに終始するを得ないのであつて、多くの場合に生産過程を考慮し少く共投資活動を其の條件とするのである。即ちポエアの如きも、節約による資本形成の段階と、企業の資本形成の段階とについて、第三表及び第四表の二表を擧げてゐるが、何れに於ても第二段階以後に於ては生産過程及び投資を問題としてゐる

第三表
節約による資本形成の段階

- (1) 節約—資本化—預金利子⁸⁾
- (2) 銀行信用—生産—貸付利子

第四表
企業の資本形成の段階



のであつて、各段階の最後が預金利子・貸付利子及び投資(貨幣的)となつて貨幣經濟的事象を示してゐる事に注意せねばならぬのである。

而してが節約が自發的に行はれるにせよ或は強制的に行はれるにせよ、何れの場合に於ても一方には消費の斷念と他方には貨幣量の餘剰とを來す事は明白であつて、茲に貨幣退藏の問題が生じ、此の貨幣退藏が資本形成の妨害とならざるか否かの問題が起るであらう。斯くて、ポエアはロバートソン及びケインズ等所謂ケムブリッジ學派の退藏理論 *hoarding-theorie* を検討してゐるのであるが、詳細の點は此處に取上げて述べるだけの價值が無い。要するに彼も亦ズエーデンホルストに倣つて銀行への預金を總て資本貯蓄 *Kapitalanlage* と見做し、¹⁰⁾ 此の貯蓄が資本市場へ投下せられないならば資本死藏の懼れがあるが、斯かる際には貯蓄資本の證券投資が大なる蓋然率を有する所より、退藏も亦資本形成の妨害とならざる所以を明らかにしてゐるのである。

8) a. O. S. 36
 9) a. a. O. S. 36-37
 10) a. a. O. S. 42

右の如く資本形成の理論は、概ね貨幣經濟的觀察より出發して後に實物經濟的觀察を混へ以て兩方面の考察を調和せんとするものであるが、斯かる二元的なる考察の調和が資本理論に於ける二元的なる考察と互に關聯し合ふ可きは言ふ迄もなき所である。

四 靜態的資本形成と動態的資本形成

資本理論並びに資本形成理論に於ける貨幣經濟的考察と實物經濟的考察とは前述の如くであるが、尙此れと關聯して、本來の節約を靜態的資本形成となし、企業の自己金融の如きを動態的資本形成とする見方が存する故に、茲で一言此の點に觸れねばならぬ。

先づ企業の自己金融とは、景氣上昇期等に於て本來の節約では急激なる經濟の變轉に步調を合せ得ない時に、企業が本來の節約以上に投資をなし、漸て生ず可き利潤の増大によつて此の過剩投資を相殺せんとするものである。従つてかかる資本形成が動態的なるは言

資本及び資本形成理論の二元性

ふ迄もなく、同時に實物經濟的なる現象に着眼せるものなる事も明らかである。然るに、本來の節約について見るに、此れは一見靜態的のもとは考へられるのであるが、それには節約の意志と投資との二つの面を有してゐる。而も節約の意志は危險を避け安全を旨とする點に於て明らかに靜態的なる意志ではあるが、投資の面に於ては此の靜態的意志の實現せられる保證がない¹¹⁾而も比較的靜態に近き景氣安定期に於ても、企業は其の維持の爲めに又は合理化の爲めにその利潤を使用するものである。故に現實の經濟に於て靜態的なる資本形成と動態的なる資本形成とが或程度迄區別し得られるのは、全く實物經濟的なる基礎に基く場合にのみ限られ、觀點を貨幣的投資の側に置けば斯かる區別は全然なし得ない事となるであらう。即ち斯くの如きも亦、資本形成の理論が貨幣經濟的なる面に觀點を置くか實物經濟的なる面に觀點を置くかによりて錯綜を生ずる一例と見得るのである。

11) a. a. O. SS. 46-48
12) a. a. O. S. 47

五 結 び

以上を以て私は、現時の市場經濟が一方に貨幣經濟的なる面を持ち他方に實物經濟的なる面を持つてゐる事自體が、資本理論及び資本形成理論に於て解き難き困難を提供する所以なる事及び現在に於ては此の兩面の觀察が如何に取扱はれてゐるかを、出來得る限り簡單に述べたのである。現今、貨幣理論景氣理論等に於て自然經濟に於ける過程と貨幣經濟に於ける過程との比較が盛んに行はれ、此等兩經濟に於ける理論が種々なる方法で調和すべく努力せられてゐるのであるが、而も尙自然經濟に於てのみ考へらる可き様式をそのまま貨幣經濟へ應用せんとし、又は貨幣經濟に於てのみ生起す可き事象を自然經濟について考察する等無數の誤謬を犯せる理論が甚だ多いのである。即ち貨幣金融理論等に於て資本形成問題に關して未だに論争の盡きないのは、此の兩者の關係についての前提的研究を未だ充分に盡して居ないが爲めではないか。此れが此の小文を記した一つの理由である。